



Title	日本研究の方法論 : データ収集の段階
Author(s)	ネウストプニー, J.V
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1994, 28, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本研究の方法論

——データ収集の段階——

J・V・ネウストプニー

一 日本研究という研究分野

二十世紀前半と後半のはじめの人間は、日本を個々の行動領域を代表する多くの研究分野 (discipline) の対象に分割し、各研究分野ごとの視点を通じて眺めることが当然だと思っていた。個々の研究分野は独立していて他の分野とは関係がなかったので、私たちが知っている日本は、数多くの断面図に刻まれて認識されてきた。学問に携わる者は、自分の研究分野の自律性を誇りにしていた。John W. Hall と Richard K. Beardsley が一九六〇年に *Twelve Doors to Japan* を刊行したとき、この本が *interdisciplinary* なものではなく、*multidisciplinary* である、つまり、学際的なものと異なり、多くの研究分野の断面図からなっていることを強調したほどである。

しかし、一九六〇年代から次第に構造主義的な理論や方法論が後退するにつれ、私たちは、日本という現象はやはり個々のスライスの集合としてだけでなく、一つの総体として存在していることに気づきはじめた。たしかに、

社会的行動の種々の領域にはある程度の独立性がある。だが、これらの分野、たとえば、社会、経済、法、文化、言語などがインタールクトすることが常であるし、これらの領域での行動は、同じ人間が担っている。ここに共通の一般原理、マクシムやストラテジーが生まれる理由もあるのではないだろうか。やはり、日本はただ領域別に見るだけではなく、一つの総体としても研究すべきであろう。

念のために申し上げるが、私の言いたいことは、伝統的な研究分野が妥当でないということではない。社会行動の種々の領域が存在する以上、それらと呼応関係にある研究分野も当然存在しなければならない。しかし、それだけで万全であるわけではない。

私たちが日本という総体を無視していたからこそ、種々の「日本論」、「日本人論」(ベフー一九八七、Mouer and Sugimoto 1986)が生じられ、vacuumを満たしたといっても過言ではないだろう。

しかし、私がここで問題にしたいのは、「日本研究」全体のことではなく、単にその形成過程の中の方法論の役割についてである。本稿では、自分自身の研究分野から出発し、そこで生まれたいくつかの新しい方法論を記述し、日本研究の他の分野での応用を考えていきたいと思う。

二 方法論とパラダイム

言語学のバラエティー(システムの最小単位)での行動は、種々のルールに支配されているが、これらのルールを五つの構成分に配置できる(Neustupny 1978) :

(1) 探求

- (2) デザイン
- (3) 実施
- (4) 社会体系
- (5) 言葉遣い (idiom)。

言語学以外の研究分野の構造も同じだと思われる。

探求のルールは、問題を規定する役割をはたしているのに対して、デザインのルールは、その研究分野のデータをもとに結論をだすもので、実施のルールは、結論の適用を決める。構成分(4)と(5)は前の三者と交叉し、それぞれ探求、デザインと実施のために必要な社会体系と、研究分野におけるコミュニケーションの仕方を支配している。

研究の方法論(また理論もそうだが)は、明らかに最初の二つの構成分のルールの一部を指す。ここでは、データの特定、つまり、探求の段階の方法論に限定して議論することにした。

しかし、方法論の話に入る前に、現在の日本研究全体には三つの類型(パラダイム)が共存することに触れておく必要がある。三つの類型とは、

- (1) 近代前期に生まれたパラダイム
- (2) 近代社会のパラダイム
- (3) ポスト近代の社会が生成しつつあるパラダイム、のことである。

私は以前、これらの日本研究の類型を、それぞれジャパノロジー型、日本研究型、現代型パラダイムと名付けた(ネウストプニー一九八二、一九八九)。各類型には多くの特徴があるが、それをすべてここにあげることができ

ないので、右の文献を参照していただくことにしたい。以下では、これら類型の違いに対応して、それぞれその方法論のルールも著しく異なることを示してみたいと思う。

二・一 近代前期の方法論

近代前期において発展してきたのは、文献学的データを利用する方法論である。さらに精密に規定するには、おそらく「テキストと物件」をデータにする方法論と言ったほうが正確であろう。つまり、これには、歴史的資料（歴史、文献学などで利用）、文学資料（普通は文学史の資料）と同時に物的資料（民俗学と考古学で利用）の使い方があげられる。これらの資料はさらに、一次的なもの（研究者自身が手に入れたもの）と、二次的なもの（たとえば、資料集として刊行されたもの）に分けることができる。（注・もちろん、二次的な参考文献というカテゴリーはさらに別個のものである。）

これらの方法論それ自身が古めかしいと思う人がいるだろうが、そうとは言い切れない。歴史的資料の使用は、種々のパラダイムのデザインと組み合わせられるからである。たとえば、ポストモダンの歴史的研究も、やはり歴史的資料を使わざるをえない、というように。とはいえ、現代のジャパノロジー型日本研究を批判する立場は、ジャパノロジーが一方的に文献学データの方法論に依存しており、これによって研究の対象がつよく制限されるといふことに基づいている（Neustupný 1993）。たとえば、社会のニーズとしては、現在の歌舞伎についての情報、理解が必要とされているのに、研究者は歴史的方法論しか持っていないので、歌舞伎の歴史を記述するにとどまるといった場合である。あるいは、アイヌの現状が問題になっているところで、歴史的な情報しか流通していないこ

ともある。ジャパノロジーは、まさにこのような限られたアプローチなのである。

科学の通俗的なイメージによると、科学者はまず解決すべき問題を選択してから、適切な方法論を決めるものだと思われている。しかし、実際には、文献学的方法論しか手元にない場合には、研究テーマはすでにそれに影響され、歴史的文献資料によって研究されるテーマしか選ばれない。なお、学者にとって大事なことは、往々にして、社会に貢献したという気持ちよりも、自分が学者として認められた、*recognition* を与えられたという気持ちであり、これも権威のある文献学的方法論による歴史的なテーマの選択を奨励するのである。現在ジャパノロジーが強く残っている社会あるいは機関ですぐれた歴史的日本研究が行われていることは十分評価すべきだと思う。しかし、ある研究システムの中に他の方法論がなかったら、歴史的な知識以外はえられない。もしも社会に他の知識に関するニーズがないのなら、それだけでいいのかもしれない。しかし、近代前期に生まれたこのジャパノロジー・パラダイムが圧倒的に歴史的研究を求めたとしても、現在の社会のニーズは「現代」日本に関する知識だというケースがかなりある。ジャパノロジーが批判される根源はここにある。

ジャパノロジーには、研究対象の異なる領域によって方法論が異なるということはない。さらに、理論もないという批判があるが、この問題はここでは取り扱わない。

なお、(歴史)文献学的方法論の他に、研究者の経験を利用し、それをまとめるというアプローチ(「経験のまとめ」)もあるにはあった。

二・二 日本研究型の方法論

近代社会の日本研究型パラダイムは、構造主義の世界である。この時代には、もちろん、文献学的方法論、あるいは「経験のまとめ」は継承され、いろいろ改変されてもちいられた（たとえば、現代のテキストの研究が付加される）が、この時期固有のものとしては、まず広く多くの分野に適用される「共時論」的なアプローチが現われた。

このアプローチを支える新しいデータの集め方としては、統計の使い方（経済学、社会学）、社会調査（アンケートとインタビュー、社会学）、*participant observation* 参与観察、（文化人類学の場合）、実験（社会心理学）、テキストの構造的分析（文学などの場合）、インフォーマント調査（言語学）などがあげられる。また経験のまとめより、もうすこしフォーマルな現状調査という方法論もできた。これらの方法論には、相違点もあるが、いろいろの共通点も見られる。たとえば、

- (1) 研究分野ごとに独自の方法論が確立している、
- (2) 現状態を対象にしている（共時論的である）、
- (3) 個々の問いに対して、一つだけの結果を求める（つまりバリエーションを軽視する）、
- (4) プロセスではなく、カテゴリーを目標としている、

などの特徴がある。いうまでもなく、これらの特徴は、日本研究型パラダイムの理論そのものと密接な関係にある。そしてその理論は、社会の在り方に由来する。近代の世界では個々の社会が相対的に独立、安定しており（つまり、

変わらないように見える)、階級的・民族的パリエーションが抑制されると同時に、いくつかの恒久的な理念(社会の近代化、民主主義、自由など)が崇拜されている。

日本の日本研究では、日本研究型の方法論は経済学、社会学などで広く適用された。日本の社会言語学でも、アンケート調査と面接調査(南一九八三)は両者を総合して「質問調査」と呼ぶ)が使われるようになった。そうした大量データの数量的処理にかかわる精力的な仕事ぶりには、敬意を表せざるをえない。

しかし、海外の日本研究の主流は、やはりパラダイム変化が遅かったことと、徹底を欠いたので、日本研究型の研究でも、少数の経済学者、社会学者、言語学者などを除くと依然として歴史文献学的方法論に忠実なものが多かった。これは、先にも述べたように、歴史的知識が強く求められたというよりも、方法論が明確に確立しており、社会体系においてその権威が高く認められていたので、方法論優先の体制になったのではないかと思われる。図書館に行つて適当な本を選び研究をはじめ、という日本研究のイメージは今もお強いのではないだろうか。

その一方で、日本研究以外の領域では、社会調査の権威が高く、日本研究を希望し大学に入る学生の中には、「これこそ科学的方法」だと思つている人は現在もいる。しかし、社会調査の支柱であるアンケートと面接調査には多くの問題がある。つまり、アンケートと現実の間の関係は非常に複雑で、人間の実際の行動について結論を引きだすのはかなり難しいと言わなければならない。

まず、

1、実際の行動があり、

2、これが人間の意識に移る(ここで、プロセシングの不完全さ、種々の態度要因などによってバイアスが現

われやすい)、また、

3、この意識をことばで表現する時に、故意に偽るということ以外に、いろいろな話題に関するルール(Neustupný 1987)のため新しいバイアスが現われる。現にアンケートと実際行動の分析(たとえば、録音の分析)を比較すると、大きな開きが現われることが多い。

社会調査や近代パラダイムに則した他の研究方法に問題があるといっても、これが現在使えないということでは決してない。大事なのは、私たちがどこで、どのようにこれをもっとも効果的に利用できるかについて考察することだと私は思う。

二・三 ポスト近代の方法論

ポストモダンの社会科学は、一九六〇年代以降の新しい社会状況に対応して生まれた。ここでは、近代社会とは正反対に、社会の中のバリエーションを尊重するようになり、社会問題、あるいは変わりやすい新しい社会でのカテゴリーよりもプロセスの重要性を研究対象にしている。国内の舞台にしても、国際社会での行動にしても、社会科学には以前にみられなかったほどの応用性が現われてきた。

こうした環境の中で研究方法への新しい要求が現われ、新しい方法論が生み出されてきた。一般原理としては、

- (1) バリエーションを提示すること、
- (2) 社会問題を記録すること、
- (3) カテゴリーではなく、プロセスを強調すること、

(4) 応用を可能にすること、

などである。たとえば、社会の平均値をとるよりも、具体的な人間の行動を具体的な場面において調査し（いわゆる case study）、個人や場面によるバリエーションを前面に引きだす方法などが高く評価される。また、実際においている問題を、おこる過程の中で観察できる方法、あるいは社会的プロセスが実際にどのように展開しているかを示す方法が要求される。これと同時に、国内の社会問題あるいは国際接触での問題を解消できるような、使用可能な結果を提供する方法が求められるのである。

この時代にももちろんマクロの研究は続くが、やはり、行動そのものを理解しようと思うと、ミクロのプロセスの調査が不可欠になる。社会全体だけではなく、個人にも焦点が当てられる。これもポストモダンの社会科学の一つの特徴だと言えよう。

また、これらのニーズに共通している点として、社会を間接的にしか見せない意識調査、テストなどよりは、自然な行動の場面からの「自然データ」が高く評価される (Schatzman and Strauss 1973) ということが指摘できるだろう。

近代パラダイムになかった新しい研究方法には、たとえば、次のものがある。

一、記録 (recording) データの研究。実際の行動が録音か録画によって記録されたあと、この記録が詳しい調査の対象になる。この方法論は特に、社会言語学で使われる比率が高い。実は、社会言語学の場合、インタースクリーンの記録に基づいていない研究は、現在ではあまり評価されないような状況なのである。

社会言語学以外の分野で、エスノメソドロジー (ethnomethodology) があげられる。エスノメソドロジーは、社会学の分野で社会言語学者が対象にしているコミュニケーションについても発言するが、基本的には社会行動プロバターの研究を目指している。たとえば、あるエスニックグループへの態度が、どのように成立するかを問題にする (Hausendorf 1993)。他にも、会話を録音し、会話分析 (Heritage 1984) を行なっている。

記録式方法論が試みられたものとして、海外 (オーストラリアのモウエル) における日本の会社のマネージメントの研究 (R. Neustupný 1991) がある。この研究では日本人とオーストラリア人のマネージャー各一人の一日の行動がビデオで記録され、マネージャーたちが参加した場面のリストと特性がえられた。このモウエルの研究には三つの意義がある。まず、日本の会社における decision making については多くの研究がなされてきたが、そのプロセスが実際にどのように展開するかについては、非常にインフォーマルなデータしか存在しない。筆者が知るかぎり、モウエルの研究が、一つの会議という場面のミクロ分析が行なわれた最初の試みであろう。第二に、日本人社員の行動がかなりインフォーマルだったということが確認されている。インタビュールしか使わない従来の調査では、ステレオタイプの影響が強く、このような行動について確かな情報はえられなかった。三番目の意義は、コミュニケーションと権力のネットワークの違いに関する仮説にかかわる。これも、実際のデータなしには、解決しにくい問題だといえる。

このモウエルの研究は、明らかに社会言語学の方法論の影響があったのだが、それ以外では、社会心理学の分野においても記録式方法論が利用されることがある。たとえば、日本研究ではないが A. Kendon & A. Ferber (1973) がかなり早い時期に映画記録によるパーティーの一部の研究を行なった。この場合も、社会言語学とのつ

なかりは明らかだが、このようにして社会言語学が他の研究分野の方法論をリードしているといえること自体が興味深い。それに対して、日本語の文法の研究では、書きことばのテキストがデータの源泉になることがあっても、話しことばの記録をベースにする研究はまだ非常にすくない。

記録のためのデータは、なるべく自然な、実際のインタクシオンからきたデータが好ましいとされている。しかし、この自然さは、被調査者側から見た自然さであって、調査者から見ると、さまざまに条件の変更が試行され、条件ごとの結果が求められるが、もちろんそれはそれでいい。したがってしばしば「実験」ということばも使われる (Antworter 1988)。日本では、実験的なアプローチを強調してきたのは荻野 (一九八八) である。この記録式方法論は、日本研究の多くの分野で利用できる。たとえば、経済のプロセス、社会のいろいろなプロセス、文化のプロセスなどに適用できるのではないだろうか。もちろん、この場合にはプロセスの細かい構造は吟味されるが、比較事例を大量にとることはできない。私たちにとって大きな集団のマクロの研究しか必要ではないという立場からすれば、記録の研究は満足できるものではない。しかし、こみいった case study を通じて、プロセスのより完全な理解を求めようとするなら、この記録データの研究しかない。

二、内省的方法 (introspection) も新しい。正統的な構造主義の立場にたつと、被調査者の行動時の意識を問うことは避けなければならない。しかし、現在は、意識が存在するかぎりそれを除外するのではなく、かえって積極的に使うべきだという考え方が圧倒的になってきた (Ericsson and Simon 1987)。人間が行動する瞬間の意識はその行動の一部であり、それなしにはその行動を理解することができないという考え方である。

この内省的方法のもっとも代表的なものは、日本研究でも多く使われてきた、後で詳しく述べるフォローアップ・インタビューであろう。フォローアップ・インタビューは、具体的な行動に際してその行動の参加者にどのような意識があったかを明らかにしようとする手続きである。これは社会言語学で用いられることが多いが、必ずしもコミュニケーションの研究でしか適用できないものではない。たとえば、前に述べたようなマネージメント（会議など）の研究、あるいは政治行動をミクロレベル（政治集会など）で研究する場合は、欠くことのできない方法だと言える。あるいは、日本の場合宗教行動には往々にして意識が伴っているので、やはりそれを明らかにする必要がある。

フォローアップ・インタビューとは違うが、文学の諒解プロセスの研究が同じカテゴリーに入ると思われる。これも、もちろん、ポストモダンの文学研究に初めて現われたものである。

生成文法の立場は興味深い。構造主義言語学は、内省的データ収集を否定し、インフォーマントの報告に基づいて研究者が書き取ったものを、そのまま、またそれだけを、データにすべきだと主張した。これに対して、構造主義以後の言語学の一つの学派である生成文法では、データは、ネーティブスピーカーの言語学者が内省して、自分で作るべきだという態度をとった（シュリーベン・ランゼ一九九〇）。このやり方は実際には、言語の中のパリエーションを疎かにする結果となったが、これは歴史的に条件付けられた具体的な生成文法のことであり、言語学者が内省を使うことは、必ずしもパリエーションを否定することにはならないと思われる。

三、以前からの方法論の再検討。ポストモダンの文脈では、構造主義の時代にできた方法を多少変化させて使うこ

ともある。

たとえば、近代型パラダイムでのインタビューは、ふだん意識調査を意味することが多いが、同じインタビュー調査が、一定の場面で実際に何が起こったかを調べることに使える。これは、「インターアクション・インタビュー」と呼ばれるものだが、これについては後で日本研究との関係でもうすこし詳しく述べる。

またインタビューは、歴史学では *oral history* という形で現われている。この狙いも、歴史過程の参加者が一般的に「どう思っているか」を調べるのではなく、具体的な歴史のプロセスを特定することにある。旧パラダイムの歴史家が、*oral history* を否定していたが、この態度はおそらく、彼らの持っていた構造主義の原理に違反していたからだと思われる。

テストも、被調査者から見てテストが意識された場面ではなく、自然な場面であるかぎりには、正統に使える。また、観察は、もちろん、バリエーションを抹殺する一般的な *statement* だけを目標にするのでなければ、たとえば具体的なプロセスを対象にするような場合、日本研究の近代型パラダイムと調和するものである。

最後に、大阪の国立民族学博物館によって採用された、古いものではなく新しい民俗学的陳列品を購入する政策は、昔から続いた「物の研究」（もちろん、古いものという意味）という方法論のきわめて興味深い革新である。

さて、このように現代パラダイムの新しい方法論の有効性を強調してきたわけだが、だからといって、これまでの研究方法が現在使えなくなったということではない。歴史的方法も、社会調査の方法も、構造的分析などももちろん使用することが望ましい。しかし、使用に当たっては、つぎの二つの条件が守られなければならない。一つは、

この使用によって、新しい方法が實際上除外されないということだ。もう一つは、一定の研究課題は新しい方法を要求するというポイントである。たとえば、日本語の手紙の場合目上に対してどのような address を使用するかは、アンケートですませることはできない。やはり、実際に書かれた封筒と手紙（データ）を集め、その中の実例を対象にすべきである。この場合のアンケートは、単に、address の過程が、どのように意識に映っているかを決めることにしか使えない。

ただ、ポストモダンの研究方法はまだ新しいので、社会科学者のための「研究方法入門」という部類の本（たとえば、シクレル一九八一、マン一九八二）にも含まれていないのが実情である。Hatch and Larraton (1991) のように、著者自身が広範に記録データを使用している場合にもこの方法への言及がないのは意外である。

三 フォローアップ・インタビューとインターアクション・インタビュー

さて、新しい方法論の例としては、ここで二つのインタビューをあげることにする。

三・一 フォローアップ・インタビュー

最近言語学でデータ・バンクという概念が一般的になり、民俗学の場合にもプロセス（儀式、祭りなど）のデータ・バンクが増えつつある。しかし、録音や録画によるデータ・バンクには、大きな問題がある。なぜなら、このような記録には、参加者の意識が記録されていないからである。

私たちが行動している間、自分の行動をモニターしたり、評価したりして、また評価の結果適切でない箇所があ

るとすれば、その訂正の適否を考察したのち、訂正を実行することもある (Neustupný 1985, 1994)。ただし、これらのプロセスがほとんど行動の表面にでないので、録音や録画の資料には記録されない。記録を補足するため、フォローアップ・インタビューという研究方法が使える。(もちろん、以上あげたすべてのプロセスが意識的であるとは限らないので、これをさらに補う方法が必要である。)

フォローアップ・インタビューは、ただ記録の後のインタビューで、被調査者のいろいろな意見や態度を確かめるものだと考える人がいるが、厳密に言うときれだけではない。フォローアップ・インタビューは、記録の時点での意識を調べる方法であり、フォローアップ・インタビューの時点での被調査者の感想や態度を確かめるためのものとは違う。これもあってもいいし、同じ場面で行なわれても構わないが、そのためにフォローアップ・インタビューの本来の目標が忘れられることはよくない。

フォローアップ・インタビューの構造

フォローアップ・インタビューはどのように行なうだろうか (Neustupný 1990)。まず、その構造について述べてから、いくつかのコメントを付け加えることにしたい。

一、ウォーミング・アップ

多くの場合、被調査者は記録の目標について事前にははっきりした知識がないわけだが、ここでそれを説明することによって、彼らの最大の協力をえられるようにする。つづいて、記録した場面の一般的な印象と問題点について聞く。たとえば、間違えたことがあったかどうか。この場合の一般的な印象は、しばしば後の細かいインタビ

ューの結果と異なる (Neustupný 1994) ので興味深い。

最後に、インタビュ어의構造を説明する。

二、記録前の意識

参加者はほとんどの場合、記録が行なわれる前に、すでにその目標、他の参加者の顔ぶれ、自分自身の役割についてそれなりの期待があった。これを確かめ、それについての考え方があとで変わったかどうかを聞く。

三、記録時の意識

つぎは、記録の短い断片（たとえば、センテンスあるいは場面の一区切り）を再生し、調査者の理解をチェックする。たとえば、言語研究の場合に、ことばがよく聞こえなかったりするが、その話し手はほとんどの場合、何と聞いたか覚えていてる。または、（本当は）何と言おうとしていたか、あるいは何をしようとしていたかを聞く。

この段階でもっとも中心的な設問は、自分の行動において規範からの逸脱をどう留意したか、さらにはそれをどう評価し、どのような調整（訂正）の計画を持ったかを調べる。また、被調査者の行動を調べたあとで、他の参加者の行動についても同じことを聞く。

四、記録後の意識

行動がおわってからも、人はその行動について意識を持つのが普通である。このようなことが被調査者にあったかどうか調べる。

五、確認

最後に、調査者が作った仮説、結論などを被調査者に知らせ、その意見を求める。これは言うまでもなく、研究者の責任を回避するための手段ではない。責任はあくまでも研究者側にあるが、被調査者の解釈もまったく参考にならないというわけではない。

コメント

以上のようなフォローアップ・インタビューは、一九七二年にメルボルンのモナシュ大学で開発された。その時に日本人と外国人の間の会話を録画したが、外国人参加者の希望に応じて再生したさい、筆者はその人があるところへ急に足を動かしたことの意味を聞いた。その外国人は、「言いたくないことを言ってしまうかもしれないということに気付き、言いなおそうかと考えたが、それもやめて、言ってしまった」とかなり複雑な意識の過程を報告したが、彼が発した日本語のセンテンスは流暢で、このような過程があったことはうかがえなかった。ただ、足が動いただけである。この後、次第に接触場面の研究にフォローアップ・インタビューが使われるようになった。たとえば、Ozaki (1989, 言語訂正の研究) と Kaneko (1992, 依頼過程の研究) では著しい効果がおさめられた。また筆者自身も、敬語回避の調査(ネウストプニー一九八三)とシンガポール英語の言語政策のための研究(Zel-stupny 1994)で、これを適用した。

フォローアップ・インタビューの手続きについていくつかのコメントを加える必要があろう。まず、時間のことだが、参加者一人当たり、記録時間の四倍程度を準備する必要がある。こうすると、当然もとの記録の長さが限ら

れてくる。また、できるだけ記録のすぐ後で行うのが望ましいが、時間的な制約などを考えると、すぐできない場合がある。私たちの経験では、一週間たっても、よく覚えていた被調査者がいる。評価的な判断が問題になるので、参加者を一人ずつ別々にインタビューする必要がある。

被調査者には大きなバリエーションがある。自分の行動についてほとんど意識がない人もいれば、詳しく行動の一つ一つの要素について考える人もいる。ラボフにはフォローアップ・インタビューという方法はないが、ニューヨークで言語意識を調べた時に、すでに *dialect deaf* の人がいたことを報告している (Labov 1966)。なお、一度フォローアップ・インタビューの対象になった被調査者は、普通自分の行動についての意識が高くなり、二度目以降は適格者とはならないので、調査を計画する時から気を付けなければならない。

インタビューの媒体になる言語は、必ずしも記録場面で使った言語ではなく、被調査者にとってもっとも使いやすい言語がいい。たとえば、英語で行なわれた日本人と外国人の会話の分析の場合でも、日本人とのフォローアップ・インタビューは日本語でも差し支えない。また、インタビューの時になるべく平易なことばを使うべきである。フォローアップ・インタビューは普通録音する。したがって、もとの記録を再生する装置の他に、さらにもう一台のテープレコーダーが必要である。

ウォーミング・アップの段階で、被調査者の発話を厳密に統制しないで、フォローアップの目的から離れたことでも、自由に言ってもらうほうがいい。つまり、彼らの満足感を大切にすることがある。しかし、このために、フォローアップ・インタビュー自体が短くならないように気を付ける必要がある。

三・二 インターアクション・インタビュー

インターアクション・インタビューの名称自体が、その目標を指し示している。つまり、このインタビューは、意識、知識、あるいは態度を測定するのではなく、インターアクションで何が実際におこったかを調べる道具である。

私たちは研究の対象にしたいすべての行動を記録し研究することはできない。たとえば、十人ぐらいが参加したパーティーでの行動を記録するのは非常に難しい。Asaoka (1987) は実際にこのような研究をおこなったさい、すべての参加者にインタビュをし、パーティーの場面でどのような行動があったか、かなり細かいところまで再構築できた。使った方法は、インターアクション・インタビューであった。

インターアクション・インタビューの特徴は、できるかぎり実際の行動のレベルに忠実であることだ。つまり、「あなたは、普通どうするか」という、一般的で、被調査者による総括を誘導する質問はしない。実際にあった具体的な場面を選択し、その具体的な一区切りについて質問をする。

インターアクション・インタビューの構造

ここでも、フォローアップ・インタビューと同じく、5つの段階をたてることができる。

一、ウォーミング・アップ

まず、被調査者に研究の目的を説明し、協力を求める。対象になっているイベントについて自由に話させ、共感

を示す。また、このインタビュアーの構造を知らせる。

二、イベントの前の調査

イベントが始まる前の、被調査者の知識、態度、期待などについて調べる。

三、イベント中の調査

イベントが始まってからの時間を小さく（たとえば、十分か二十分で）区切り、まず行動の *etic* な「地図」を作る。たとえば、「九時から十五分間までなにをしたか」と聞くと、その間に、A にあいさつした、一通の手紙を読んだ、仕事をはじめたという返事がくる。この *etic* な場面の「地図」ができたら被調査者に確かめながら、これを *emic* な場面のリストに改める。つづいて、これらの場面の参加者、目的、内容、形などを確認し、イベントの一つ一つのセグメントにおいて、規範からどのような逸脱があり、それがどう評価され、どのような調整の計画があったかなどを調べる。最初は被調査者の行動を対象にし、ついでに他の参加者の行動に移る。

四、イベント後の調査

イベントがおわってから、どのような行動と意識があったか調べる。

五、確認

最後に、被調査者にインタビュアーの結果生じた自分の仮説を提供し、反応を確かめる。

コメント

この方法は、W. Mackey の論文から出発してできたもので、浅岡高子などによって広くパーティー、あるいは調査者が同伴できなかった観光旅行の研究、また多くの小規模の調査に使われた。その応用範囲は非常に広い。この方法によると、現実の行動をよく反映する結果がえられるが、言語能力の研究にはむかない。なぜなら、だれがどのことばを使ったかは、あいさつや例外的な場合を除けば、参加者の意識に残っていないからである。

時間的には、やはり、できるだけ対象になっているイベントのすぐ後で、たとえば、午前中のイベントの場合、その日の午後調べるのが望ましい。前にさかのぼって調査すると、記憶に残らないポイントが多くなり、被調査者が具体的な行動ではなく、「いつもの行動」を報告する可能性が強くなってくる。やはり、被調査者によるバリエーションが大きい。フォローアップ・インタビューと同じように、報告されたポイントはそのまま現実を代表するものではなく、単なる資料だということを忘れてはならない。記録を助けるためには、手帳、日記帳、地図などを使わせたり、あるいは内容的にさしつかえないかぎりは、チームでのインタビューも可能である。

インタビューで使う言語はやはり被調査者にとってもっとも有利な言語がいい。またこのインタビューは、ノートを取りながら、やはり録音したほうがいい。

すでにふれたように、被調査者に自由に話させたほうが、雰囲気がよくなるが、そのために焦点がずれ、被調査者が「いつもの行動」を報告することにならないように気をつける必要がある。

四 結論

日本研究のパラダイムが変わると同時に、方法論も変わり、データの求め方は一通りではない。ジャパノロジーの非常に簡単な方法論に、日本研究型パラダイムが新しい方法を加えた。また現代型パラダイムでは、さらに新しいアプローチが現われつつあると言える。

方法論は、かなり精密にそのパラダイムの理論を反映している。また、一旦習得された方法論は、データの求め方を決定するだけではなく、それ自体が、調査研究の内容を決める性質を持っている。私たちがまず問題を選出し、それに研究方法を合わせるということもあるかもしれないが、多くの場合、親しみのある方法論で、つぎにどのような題材を扱うかを決めるのではないだろうか。

現在日本研究でもっとも新しく、ポストモダンの社会によって生成される「現代型パラダイム」の方法論は、日本研究の一部の分野にしか行きわたっていない。その理由は、その分野の特殊性によって説明されるはずだという人が多いだろう。そうかもしれない。しかし、社会的プロセスは社会言語学の分野に限られているのではない。あるいは、表層化する思想や意識と、そうでない思想や意識も、社会言語学の行動だけに限られているとは考えられない。将来は、現在の方法論のパラダイムから離れ、次第に多くの研究分野が社会的プロセスをプロセスとして調査研究するようになることが望ましい。

方法論がある特定の分野から他の分野に移るのは、one-disciplinary な研究の場合よりも、学際的な日本研究のような分野のほうが可能性が大きい。そうだとするならば、「日本研究」の役割が日本研究の枠を越えることにな

るかもしれない。

参考文献

- Asaoka, Takako (1981) *Communication Problems between Japanese and Australians at a Dinner Party* Melbourne : Japanese Studies Centre
- Auwärter, M. (1988) "Das Experiment in der Soziolinguistik" *Sociolinguistics, An International Handbook*, ed. by U. Ammon, N. Dittmar and K. J. Mattheier, 2nd Volume, pp. 922-931 Berlin : de Gruyter
- ベノ、クルシ (一九八七) 『エテホロキーとソノの日本文化論』 昭想の社
- Ericsson, K. A. and H. A. Simon (1987) "Verbal reports on thinking" *Introspection in Second Language Research* ed. by C. Faerch and G. Kasper, pp. 24-53 Clevedon : Multilingual Matters
- Hatch, E. and A. Lazarson (1991) *The Research Manual* New York : Newbury House
- Hausendorf, H. (1993) "Das Eigene und das Fremde" Report Nr. 5/93 der Forschungsgruppe Nationale Selbst- und Fremdbilder in osteuropäischen Staaten, Universität Bielefeld
- Heritage, J. (1984) *Garfinkel and Ethnomethodology* Cambridge : Polity Press
- Kaneko, E. (1992) *Responses to a Request in Australian-Japanese Contact Situations* M. A. thesis, Department of Japanese Studies, Monash University
- Kendon, A. and A. Ferber (1973) "A description of some human greetings" *Comparative Ecology and Behaviour of Primates*, ed. by R. P. Michael and J. H. Crook, pp. 591-668 London : Academic Press
- Labov, W. (1966) *The Social Stratification of English in New York City* Washington : Center for Applied Linguistics
- ベノ、A・H (一九八二) 『社会調査を学ぶ人のために』 世界図書社
- 南不二男 (一九八三) 「現代日本語の資料について」 『国文学研究と鑑賞』 四八—六〇 至文堂
- Mouer, R. and Y. Sugimoto (1986) *Images of Japanese Society* London : KPI

- Neustupný, J. V. (1978) *Post-Structural Approaches to Language* University of Tokyo Press
- ネウストプニー, J. V. (一九八二) 「日本研究のベラダタイム」 杉本良夫・マホア, R 編 『日本人論に関する十二章』
学陽書房
- ネウストプニー, J. V. (一九八三) 「敬語回遊のストラテジーについて」 『日本語学』 一一一 明治書院
- Neustupný, J. V. (1985) "Problems in Australian-Japanese contact situations" *Cross-Cultural Encounters* ed. by
J. B. Pride, pp. 44-84 Melbourne: River Seine Publications
- Neustupný, J. V. (1987) *Communicating with the Japanese* The Japan Times
- ネウストプニー, J. V. (一九八九) 「日本研究のベラダタイム: その多様性を理解するために」 『世界の中の日本人』 国
際日本文化研究センター
- Neustupný, J. V. (1990) "The follow-up interview" *Japanese Studies Association of Australia Newsletter* 10/2
pp. 31-34.
- Neustupný, J. V. (1993) "Japanology and beyond" *The Japan Foundation Newsletter* 21/1 pp. 9-12
- Neustupný, J. V. (1994) "Problems of English contact discourse and language planning" *English and Language
Planning* ed. by T. Kandiah and J. Kwan-Terry, pp. 50-69 Singapore: Times Academic Press
- Neustupný, R. (1991) *Australians and Japanese at Morwell: Interaction in the Work Domain* Melbourne: Ja-
panese Studies Centre
- 萩野綱男 (一九八八) 「言語生活研究と調査」 『言語生活』 四三六 筑摩書房
- Ozaki, Akito (1989) *Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese* Canberra:
Pacific Linguistics
- シクレル, A (一九八一) 『社会学の方法と測定』 新泉社
- Schatzman, L. and A. L. Strauss (1973) *Field Research: Strategies for a Natural Sociology* Prentice Hall
- シユリーベシランゲ, B (一九九〇) 『社会言語学の方法』 三元社